

国際学校における国語科カリキュラムとその可能性

— 新学習指導要領の施行を見据えて —

井上 志音（関西学院千里国際中等部・高等部）

第1章 研究の意義と目的

日本の教育体制において、とりわけ1985-87年の臨教審答申および1989年の学習指導要領の改訂以降、「国際化」や「国際教育」という概念は多義的に用いられ、総合的な学習の時間の新設や小学校における英語学習の導入といった様々な政策としてその問題の解決が試みられてきた。

昨今では「国際化」や「グローバル化」をキーワードに、中等教育・高等教育機関においても国際化や国際系学部の新設が推し進められている。その背景には日本の学生が世界市民の一人として国際的な問題の解決を担う資質を身につけることを目指す「グローバル人材育成⁽¹⁾」への社会的な要請があり、文部科学省が2012年に打ち出した「グローバル人材育成推進事業」や「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進」などもその政策の一例に挙げられよう。

このような国際化の潮流の中、学校法人関西学院が設置する関西学院千里国際中等部・高等部（以下 SIS）は、併設する関西学院大阪インターナショナルスクール（以下 OIS）との相互連携のもと、入学してくる生徒の多様な履歴に対応し、生徒たちが共に啓発し合いながら学べる学習環境を作り上げるために、「学期完結制」「自由選択制」「無学年制」という独自の制度を導入しながら教育活動を実践してきた。現在も学校法人関西学院の「グローバル人材育成推進事業〈全学推進型〉」に提携する傍ら、「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進に関する調査研究」の指定校として、国際バカロレアのカリキュラムや指導方法、評価方法等に関する調査研究を行っている。

SIS の国語教育に焦点をあてると、本校に入学する帰国生徒・外国人生徒は国内の一般生徒と比較してもその履歴や入学事情に応じて言語能力の習熟度に大きな個人差があるため、国語科は常に OIS の日本語科と連携しながら生徒の学習到達度を個別的に見つめ、「普通国語」「基礎国語」「日本語」という多様なクラス編成の中で、生徒に寄り添ったきめ細やかな学習支援を実現してきた。

2009年に告示された高校の新学習指導要領の施行を目前に控えたいま、SIS が導入してきた「学期完結制」「自由選択制」「無学年制」の10年間の成果と反省を概観し、海外帰国子女の受け入れ校における今後の国語教育と国語科カリキュラムの可能性を見出すことが本論考の主たる目的である。

第2章 SIS 独自の履修制度とその成果

第1節 「学期完結制」の導入とその理念

SIS は1999年度以降、春学期（4-6月）、秋学期（9-11月）、冬学期（12-3月）の3学期制を採

っており、各学期には60日の均等な授業日（週5日制の12週）が設けられている。高等部ではほとんどの授業内容が学期毎に完結するよう定められており、それぞれの学期末に成績・単位を認定することになっている。この制度を本校では「学期完結制」と呼んでいる。学校種で考える場合、本校は全日制普通科ではあるが、学年制ではなく単位制に近い学校体制であることがわかる。

この学期完結制を導入する最大の利点は、併設する OIS との合同授業・交換授業を実現できる点にある。学期毎の授業を1学期間で完結させることにより、4月始まりの SIS と、9月始まりの OIS との制度上のギャップを克服し、それぞれ2つの学校が合同で授業を行ったり、相互に授業を交換したりすることを可能とした⁽²⁾。また年度途中で海外から編入学する生徒にとっても、それぞれの学期で在校生とともに新たなスタートを切ることができ、円滑に学習生活に順応することができる。

在校生にとっても、授業が学期単位に分割されることによって、必修科目を必要最小限の時間で履修することができるため、必修以外の科目を卒業までにより自由に履修することができるという利点が挙げられよう。

第2節 「自由選択制」「無学年制」のシステム

多様な背景（履歴・入学事情）を抱える生徒が、各学期において各人の学習到達度および進路に合った授業を選択できるよう、本校では下図のように全授業時間帯をⅠ～Ⅶの7つのブロックに分けてそれぞれに各教科の授業を置き、生徒が自由に授業を選択できる体制を採っている。科目選択のなかで、生徒は得意科目を伸ばさせることはもちろんのこと、苦手科目を克服したり、単位を落とした科目の再履修をしたりすることもできる。これが自由選択制の概要である。

表1 「SIS ブロックシステム」

		月曜日 Mon.	火曜日 Tue.	水曜日 Wed.	木曜日 Thu.	金曜日 Rfi.
	8:30	SHR	SHR	SHR	SHR	SHR
1限	8:45-9:40	Ⅰ	Ⅵ	Ⅲ	Ⅶ	Ⅲ
2限	9:40-10:35	Ⅱ	Ⅶ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ
3限	10:35-11:30	Ⅲ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅵ
4限	11:30-12:25	Ⅳ	Ⅴ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅳ
	12:25-12:45	Flex Time				
5限	12:45-13:40	Ⅴ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅳ	Ⅴ
6限	13:40-14:35	Ⅵ	Ⅱ	Ⅶ	Ⅲ	Ⅰ
7限	14:35-15:30	Ⅶ	Ⅲ	LHR	Ⅵ	Ⅶ

生徒は卒業までの取得単位数を自分で管理しながら各学期の授業シラバスに沿って授業を試行錯誤しながら選択していくなかで、自身の進路適性を考え、その方向性に沿った履修計画を主体的に築き上げていくことができる。また、授業はこうした「学期完結制」「自由選択制」の特性上、一条校/インター、国内生/海外生、上級生/下級生といった枠組みを超えて実施されるため「無学年制」とも呼ばれるが、そうした多様な生徒の集う授業空間がグローバル化時代を生き抜く力を育むことを可能にしている。

第3章 新学習指導要領の施行にむけて

第1節 SIS 国語科の開講科目

前章で触れた諸制度のもと、現在、SIS 国語科が高等部において開講している科目の一覧（旧課程版）は次の表の通りである。「国語総合1」「国語総合2」のみが必修科目となっている。

表2 「SIS 国語科 開講科目一覧」

科目名	Course Code	週時数	教科書(出版社)	要録	単位	春-開講数	秋-開講数	冬-開講数
国語総合1(現)	JN31m	2	高等学校「国語総合」(第一学習社)	国語総合	1	4	1	1
国語総合1(古)	JN31c	3	高等学校「国語総合」(第一学習社)		1	4	1	1
国語総合2(現)	JN32m	2	高等学校「国語総合」(第一学習社)	国語総合	1	1	4	1
国語総合2(古)	JN32c	3	高等学校「国語総合」(第一学習社)		1	1	4	1
現代文1	JN3m1	2	高等学校「国語総合」(第一学習社)	現代文	1	1	1	1
現代文2 a	JN3m2a	2	高等学校「現代文」(三省堂)	現代文	1	2	1	4
現代文2 b	JN3m2b	2	高等学校「現代文」(三省堂)	現代文	1	1	2	1
現代文3 a	JN3m3a	2	高等学校「現代文」(三省堂)	現代文	1	1	1	1
現代文3 b	JN3m3b	2	高等学校「現代文」(三省堂)	現代文	1	1	1	1
現代文3 c	JN3m3c	2	高等学校「現代文」(三省堂)	現代文	1	1	1	1
古典1	JN3c1	3	高等学校「国語総合」(第一学習社)	古典	1	1	1	4
古典2 a	JN3c2a	3	高等学校「古典 古文編/漢文編」(第一学習社)	古典	1	2	1	1
古典2 b	JN3c2b	3	高等学校「古典 古文編/漢文編」(第一学習社)	古典	1	1	2	1
古文3 a	JN3c3a	2	高等学校「古典 古文編」(第一学習社)	古典	1	1	1	1
古文3 b	JN3c3b	2	高等学校「古典 古文編」(第一学習社)	古典	1	1	1	1
古文3 c	JN3c3c	2	高等学校「古典 古文編」(第一学習社)	古典	1	1	1	1
漢文3 a	JN3k3a	2	高等学校「古典 漢文編」(第一学習社)	古典	1	1		1
漢文3 b	JN3k3b	2	高等学校「古典 漢文編」(第一学習社)	古典	1	1	1	
現代文演習1	JN3m3s1	2	「現代文の演習グレード2」(桐原書店)	現代文	1			1
現代文演習2	JN3m3s2	2	「現代文の演習グレード3」(桐原書店)	現代文	1	1		
現代文演習3	JN3m3s3	2	「現代文の演習アチーブ4」(桐原書店)	現代文	1		1	
古典演習1	JN3c3s1	2	「古典の演習アチーブ2」(桐原書店)	古典	1			1
古典演習2	JN3c3s2	2	「古典の演習アチーブ3」(桐原書店)	古典	1	1		
古典演習3	JN3c3s3	2	「古典の演習アチーブ4」(桐原書店)	古典	1		1	
小論文	JN3exx	2		現代文・総合	1	4	4	3

第2節 新課程における国語の果たすべき役割

高等学校の新学指導要領における国語の国際人育成に向けての記述、例えば「広い視野から国際理解を深め、日本人としての自覚をもち、国際協調の精神を高めるのに役立つこと」「教材は、思考力や想像力を伸ばす学習活動に役立つもの、情報を活用して表現する学習活動に役立つもの、歴史的・国際的な視野から現代の国語を考える学習活動に役立つものを取り上げるようにする」といった内容からもうかがえる通り、新課程においては「総合的な学習の時間」以外の各教科・科目でも国際社会で生き抜く力、国際理解の促進が言及されており、現在、初等・中等教育の学校現場では現実的かつ具体的な実践方法の模索が試みられている。

新学習指導要領の第2章・第5章には「横断的・総合的な学習を通して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の在り方、生き方を考えることができるようにする」とあり、「生きる力」という概念を基盤に、各教科・科目の「横断的」な学びの必要性が説かれている。「横断的」の意味内容については解説書に「横断的、総合的な課題とは、国際社会、情報、環境、福祉、健康等、現代社会が抱える生活上の諸課題を扱うこと」「実社会、実生活とのつながりを感じながら学ぶことがより一層重要であり、各教科・科目における学習の意義を実感し発展させていくこと」「人や社会、自然とのかかわりにおいて、自らの生活や行動について考えていく」とあり、生徒が自身を取り巻く国際社会の中で自立して生き抜く力を体得するために、自らと実社会との結びつきを自覚することの重要性がうたわれている。

第4章 現行カリキュラムの課題と今後の可能性

第1節 断片から連続へ—学期完結制の抱える課題

前章で触れたとおり、新課程で実現されるべき横断的な教科学習を考えた場合、本校が導入してきた「学期完結制」といった諸システムが抱える課題は明白である。学期完結制によって細切れに寸断された教科学習は、教材・教科担当者・履修者が毎学期移り変わっていく中で、生徒に高校1年から高校3年までの体系的な国語科カリキュラムの全体像を見失わせる危険性がある。国語への苦手意識から国語の履修を必修科目の国語総合だけで終えてしまったり、学期をまたいで断片的に国語を履修したりすると、高校1年から高校3年までの言語学習の重層的な結びつき（いわば「タテ」のつながり）への意識が薄くなるだけでなく、同時に履修科目が毎学期生徒の嗜好に合わせて変動するため、国語と国語以外の他教科と横断的な関係（「ヨコ」のつながり）も希薄になってしまう。

確かに帰国生・海外生の受け入れという使命を担う国際学校にとって、編入生の円滑な迎え入れは至上命題であり、その上で学期完結制が重要な役割を果たしていることは言うまでもないが、受け入れた帰国子女の卒業までの継続的な言語学習を考える場合、現行の学期完結制を新学習指導要領にあわせ、重層的かつ横断的なカリキュラムを包含するものへと改善していくことが今後の課題であろう。

第2節 重層的かつ横断的なカリキュラムの構築にむけて

現行の学期完結制等のシステムを生かしつつ、よりナショナルシラバスに即したのものへと進化させる方法論の一つとして、併設型中高もしくは中高一貫教育校で導入されている教科担当および学年担任団の「持ち上がり制」が挙げられる。教科指導および生徒指導の効率化を実現するこの「持ち上がり制」は、主に大学進学に重きを置く進学校において広く採用されている⁽³⁾が、帰国子女教育を掲げる国際学校においても、高校3年間とまではいかなくとも、1年もしくは複数学期という限定的な期間の中で部分的に採用することは可能である（例えば国語の場合、必修科目の「国語総合」を、担当者の変動がない通年科目として新たに設置し直し、教科内の連続性を図ることもできよう）。履修期間の長期化や必修単位数の引き上げが生徒の科目選択の幅の矮小化を引き起こすことは留意すべきだが、継続的な学習を必要不可欠とする国語の教科特性を念頭に置いて、その教科特性を考慮に入れた履修プログラムの再構築を目指さなければならない。そして、そうした個別の履修プログラムを含んだ重層的で横断的なカリキュラムを確立するためには、国語だけに焦点を当てるのではなく、他教科の内容・特性・進度までも見わたす包括的な視点が必要であろう。

【注】

- (1) 詳細は文部科学省（2012）「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」の最終報告を参照のこと。
- (2) 特に体育・芸術・英語については、OISと合同で授業を行っている。授業中の使用言語は主に英語である。
- (3) 一例として、私立 灘中学校・灘高等学校の6年間の担任（兼教科担当）持ち上がり制が挙げられる。

【参考文献】

- 眞砂和典（2001）「学期完結制とその経緯」千里国際学園研究紀要第6号、pp. 17-39
 福島浩介（2001）「学期完結制に関する考察」千里国際学園研究紀要第6号、pp. 46-50
 文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領』
 日本学術振興会（2012）「グローバル人材育成推進事業」<http://www.jsps.go.jp/j-gjinzai/gaiyou.html>（2013年2月9日）